

《研究ノート》

古高ドイツ語シントクス研究の展望⁽¹⁾

飯嶋 一泰

はじめに

周知の通り、ドイツ語の現在完了は *haben/sein* + 過去分詞という形式を取るが、同様の現在完了形はドイツ語に限らず広くゲルマン諸語に観察される。この広範な分布を見ると、これがゲルマン語伝来のシントクス現象であると即断したくなるが、言葉の歴史をたどっていくと、必ずしもそのような判断が妥当ではないことが判明する。

haben + 過去分詞に話を限ってみると、この形式はゲルマン語最古の文献である *Wulfila* (311?-388) のゴート語訳聖書に現れず、ドイツ語でも古高ドイツ語「以下 *Ahd.* と略す」初期の文献には全く例証されていない。*Ahd.* 最古の例証は九世紀になって初めて記録されている。しかも、九世紀前半の用例においては、たとえば、

phigboun habeta sum gifanzolan in sinemo uin-garten. 「いちじくの木がある人が自分の葡萄畑に植えておいた(= 植ええられた状態で持っていた)。」(*Tatian*

102, 2)

のように、「……を」として持っている」という意味が濃厚で、過去分詞には *haben* の直接目的語の性・数に一致した曲用語尾が付されている。ところが、九世紀後半の *Orhid* の *Evangelienbuch* では曲用語尾無しが普通になり、*Ahd.* 末期の *Notker* においては、自動詞にもこの形式が適用されるに至る⁽²⁾。

Nu habent sie dir ubele gedanchot. 「今彼らは汝に悪行をめぐって報じた。」(*Notkers Psalmen* 76, 21)

このように、日頃何の違和感もなく用いている現在完了形が、実はドイツ語本来のシントクス形式ではなく、中世のある時期に徐々に形成されてきたものであることが、*Ahd.* の言語資料の分析を通して明らかになる。

Ahd. 期 (600-1050頃) は、ドイツ語(といっても統一された言語ではなく、部族語に基づく諸方言であるが)で初めて文献が書かれた時代である。次章で述べるように、伝承されている文献は質的・量的に中高ドイツ語や初期新高ドイツ語とは比べものにならないほど貧弱であるが、ドイツ語の最古の姿を伝えるが故に、きわめて高い資料価値を有する。史的シントクス研究にとっても、*Ahd.* が不可欠の情報源であることは、上に略述した現在完了形の形成過程を見れば、否定できないであろう。

一 古高ドイツ語の言語資料的制約

しかしながら、この *Ahd.* シントクス研究にはいくつかの困

難が伴う。その最たるものが、Ahd. の資料的制約である。これには質的側面と量的側面の双方が存在する。

まず、量的側面から見ていくと、写本の形で五十葉(百頁)を越す文献(語句注解を除く)は Benediktinerregel (790/800) Tatan (830頃) Othrid & Evangelienbuch (863/71に完成) および Noker (950?-1022) の作品(Boethius, Martinus Capella, Categoriae, De interpretatione, Psalmen)のみである。語句注解(Glossen)は相当量伝えられているが、シNTAX研究には資するところが多いとはいえない(名詞句の分析資料などとしては部分的に使用できるであろう)。研究对象とするシNTAX現象の出現頻度にもよるが、統計的に有意なサンプルを集めることは多かれ少なかれ困難である。次に、質的側面であるが、ここではとりわけ次の諸点が考慮されるべきであろう。

第一に、資料の成立年代・方言が区々であること。Ahd. 期は五百年弱、文献時代に限っても約三百年にわたる。その間には当然かなりの言語的変化が生じたはずである。冒頭に述べた haben+過去分詞という現在完了形も、他ならぬこの時期に生じたのである。また、空間的にも、Ahd. はいくつかの方言から成り立っている(正確を期せば、いくつかの方言の上位概念として、今日の目から古高「ドイツ語」という総称を用いているに過ぎない)。これらの方言は、互いに一定の親縁・接縁関係にはあるが、多少なりとも統一的な標準「書記」言語を形成しているとは言えない。このような、時間的・空間的差異を考慮すれば、Ahd. 資料全体を一つの「体系」として記述するこ

とは不適切と言わざるをえない。Ahd. シNTAXの共時的記述を行なうためには、限られた分量の資料をさらに時代ごと方言ごとに小分けして作業をする必要がある。

第二に、資料の大半をキリスト教文献が占めること。「書く」という作業が主に修道院でなされたという社会状況を反映して、Ahd. の大部分の文献は、福音書、詩篇、聖歌、祈禱、信仰告白(信経)、告解、説教、修道会則などのキリスト教関連のものになっている。キリスト教以外の分野のまとまった資料としては、Noker の Boethius 等々があるが、これも修道士教育の一環として成立を見たものである。他には、英雄歌謡 Hildebrandslied (八世紀末)、呪文 Merseburger Zaubersprüche (九世紀初頭)、法律 Lex Salica (九世紀初頭)、証文 Würzburger Markbeschreibung (十世紀) など断片的なものを残すのみである。したがって、Ahd. のシNTAX研究は主に教会言語というテクスト種を対象として行なわれることになる。

第三に、ラテン語からの翻訳がかなりの部分を占めること。Ahd. の文字自体がラテン文字の借用であるが、Ahd. 期の文献もその大半はオリジナル作品ではなく、ラテン語の著作の翻訳であった。翻訳といっても様々なレベルが存在した。最も素朴な形態は行間逐語訳(Interlinearversion)で、これは単語ごとの語句注解を原典の語順のままに並べたものである。その代表的なのがテクスト上に引用した Benediktinerregel である。この「proprii sequatur cordis voluntatem tei-kanes si kefolgeet herzin uuilin のように、一つの名詞句中に他の文肢が割り込む極端なケースも含めて、機械的な

Wort-für-Wort-Übersetzung がなされている。次に、行間逐語訳ではないが、それにかなり近い逐語的翻訳もある。総合福音書 Tatian がその代表的な例である。これも、ラテン語への依存度が相当高いため、シンタクス研究のための資料価値は制限されざるをえないが、逆に逐語訳であるが故に、原典と相違する部分に Ahd. 本来の特徴を見出すことができるとも言える(この点に関しては次章で触れる)。このような「準」逐語訳と並んで、かなり早い時期から原典にしばられるところの少ない自由な翻訳もなされている。たとえば、テクスト2に引用した Isidor (790/800) が、同時期の Benediktinerregel とは全く対照的な翻訳であることは、一目瞭然であろう(語順や絶対尊格の訳出法に注目されたい)。この種の翻訳には、より高い資料価値を認めることができるが、それでもこれらをそのまま Ahd. 本来の姿と考えることはできない。また、オリジナル作品でも、Otrid のように聖書や教父の原典に依存している部分が少なくない文献もある。これらも百パーセント真正の Ahd. シンタクスを伝えるものと見なすべきではないであろう。

第四に、一部の資料が韻律の制約を受けていること。Ahd. 文献の中では韻文は散文に比べて少なく、十一世紀中頃の作品 (Wiener Genesis, Ezzoliad など) を算入しなければ、全体で長詩行にして八千行弱である。その大部分に当たる七千四百行強は脚韻詩の Otrid が占め、他の諸作品は合計して五百行に満たない(頭韻詩はそのうち二百行強)。結局、Ahd. の全韻文作品を合わせても、Nibelungenlied に及ばな分量とということであるが、Ahd. のオリジナル作品の中では、韻文の割合

は決して低くない。散文の翻訳テクストより、韻文のオリジナルテクストの方が Ahd. 本来の語法を伝えている場合もあるはずであるから、韻律の制約を受けているという理由のみで、これをシンタクス研究の対象から外すことは妥当ではない。ここで、テクスト3に引用した Otrid の一節により、シンタクス研究資料としての韻文作品の限界と可能性を考えてみよう。一、四行目と六行目は各半詩行がすべて所有代名詞で終わり、「名詞+所有代名詞」の語順を示している。これだけを見る限り、Ahd. では所有代名詞の後置が通常の語順であるように思われるであろう。しかし、たとえば Isidor を調べてみると、ラテン語原典の語順に反してほとんどの場合「所有代名詞十名詞」となっており、こちらがむしろ Ahd. の常態であったと推測される。したがって、Otrid の用例は、脚韻の要請に基づくものであると考えた方が良さそうである。ただ、ゲルマン語では本来「名詞+所有代名詞」の語順であったという説もあり、だとすると Otrid の韻文にアルカイックな語法が保持されていると見ることも可能になる。

二 古高ドイツ語シンタクス研究の展望

以上指摘してきたような制約にもかかわらず、Ahd. シンタクスの研究は十九世紀以来地道に続けられてきた。その嚆矢となったのは Jacob Grimm: Deutsche Grammatik, Bd. 4 (1837) であるが、とりわけ十九世紀末期から今世紀初頭にかけて Oskar Erdmann, Wilhelm Wilmanns や Otto Behagel などが、今日なお不可欠と見なされる著作を次々発表して

いる。これらはゴート語や古英語など他のゲルマン諸語を視野に入れたドイツ語歴史シンタクスでAhd.のみを扱うものではないが、一方で、Ahd.の個別作品や、Ahd.シンタクスの個別テーマを扱う研究も盛んになされている。この流れは今世紀を通じて連続と続き、Ingerid DalやW. B. Lockwoodによる概説書と並んで、相当数のモノグラフィが現れている。このような状況の中で、出現が待ち望まれているのは、Ahd.を一般的に概観する通時的シンタクスである。ゲルマン語やドイツ語史全般を対象とする浩瀚なシンタクスが何点か存在する一方で、総合的なAhd.シンタクスが―入門書等の中の略説を除き―未だ公刊されていないのは、やはりその資料的制約による面が大きいであろう。

ここで、そのような総合的Ahd.シンタクスを念頭において、今後の研究の可能性を考察してみたい。まず、出発点とすべきは、Ahd.の個別文献のシンタクスを共時的レベルで記述する作業である。なぜなら、言語は現代語であれ古語であれ、一つの「体系」として記述されるべきだからである。この作業は部分的にはすでにいくつかの先行研究においてなされているが、問題はそれらが用いている方法が区々なことである。全ての研究が統一的な方法論に基づいて行なわれていれば、それらの結果を集成することは比較的容易になるであろう。しかし、方法が研究の命である限り、他者の方法に安易に追随するのも考え物である。実践的な研究と並行して、方法に関する議論を建設的な形で重ね、その中からAhd.シンタクス記述に適したものを採用していくしかあるまい。

その意味で、比較的新しい研究のうち注目し値するのは、Albrecht Greuleによるヴァレンツ理論的動詞記述、Anne Bettenによるテクスト言語学的アプローチなどである。

Greuleは彼の理論によって、文字どおり“althochdeutsche Gesamtsyntax”を作成することを目標として掲げている。彼の主張(26)に関しては日本語による比較の詳細な紹介がすでになされているので、ここで逐一繰り返すことは避けるが、写本を出発点に置いて、従来のテクスト校訂にとらわれずにシンタグラムの分節を行なう作業から始めるといふ、手堅い手法を採用している。Ahd.のように資料的制約の大きい対象に取り組む場合には、このくらいの慎重さはあってしかるべきであろう。肝心のヴァレンツ記述も、Ahd.の動詞句の記述に有効であり、この方法がより多くの文献に適用されていくことが期待される。ただ、補足成分(Ergänzung)と添加成分(Angabe)を出現頻度によって単純に区分するのは、インフォーマントテストが不可能であるからといえ、機械的に過ぎるように思われる。

Bettenは、古語のシンタクスを文の範囲内にとどまらず、テクストのレベルで分析することを提唱している。実例に即して説明すると、テクスト4に、ラテン語のヨハネ伝の一節とそれに対応するTatianの訳、そして参考のためにルター訳(一五四五年版)が挙げられている。Tatianの引用箇所では、whoは五例現れるが、そのうち一例がラテン語のほかに、二例がautemに対応し、残る二例は対応語がない。一方ラテン語の側から見ると、etに対しては上述の一例のwhoの他、五例のquiが対応している。ところが、ルター訳ではet(tra)は

vnd i dazup, anem (de) は aber によって首尾一貫訳されており、対応語無しの訳語も見出されない⁽²⁾。「奴隸的」逐語訳と評されることすらある Tatian の方が、令名高いルター訳よりも柔軟な対応を見せていることは意外であるが、これに対する解答を Betten は Harald Weinrich のテキスト理論を援用して導き出している。彼女は、Tatian の最初の四分の一の部分における接合詞 *tho* の用法を分析し、これが語り (Beicht/Erzählung) の部分に集中して用いられていて、そこで聞き手の注意を喚起するメタコミュニケーション的機能を担っていることを確認する。Betten の説は、新たな角度からのアプローチが対象に新たな光を当てることを実証するとともに、「Tatian 逐語訳」といった類の定説を今一度疑ってみることに必要性も痛感させてくれる。

Greule & Betten も、一文献の共時的記述を研究の基礎に据えているが、Ahd. には十分なサンプル数を持つ大きな文献が少ないため、結果として複数の文献にコーパスを拡大せざるを得ない場合が生じる。その場合、対象文献の選定は成立年代・方言を考慮して慎重に行なわなければならない。幸か不幸か、Ahd. の文献の伝承にはかなりの片寄りがあるので、八百年前後のアレマン語、九世紀のフランケン語、十一世紀のアレマン語などについては比較的多くの資料に基づく「準共時的」研究が可能である。しかし、いずれの場合においても、コーパスの拡大は、必然的にその均質性の低下をもたらすということを明確に意識していなければならない。

以上述べたような共時的ないし準共時的研究の積み重ねの上

に、Ahd. の通時的シンタックスが確立されるのが理想である。そのようなシンタックスが完成すれば、Ahd. のテキスト理解やドイツ語シンタックスの通時的研究に大いに裨益することとまらず、ゲルマン語比較シンタックスにとっても有用な Tertium comparationis となることであろう。特にゲルマン語比較シンタックスにおいては、従来 Ahd. は、広汎なオリジナル散文文献を伝える古英語や古アイスランド語に比べて軽視される傾向があったが、一見「奴隸的」とさえ思われる Ahd. 翻訳文にも光の当て方によっては相応のゲルマン的要素が検出されうることがわかった。制約は制約として認識した上で、緻密な分析作業を重ねれば、Ahd. シンタックスにおいても一定の成果に到達することは可能であろう。

(1) 本稿は、一九九二年十月八日に日本独文学会で行った口頭発表「古高ドイツ語シンタックス研究の現状」の一部を加筆・訂正したものである。

(2) 現代の英語では *be* 動詞による現在完了形はもはや用いられないが、シェイクスピアなどには、*Sith I am entered in this cause so far* 「この問題にこのまで足を踏み込んだからには」(Othello III, iii, 411) *your son was run away* 「あなたの息子さんはお逃げになった」(All's Well that Ends Well III, ii, 46) といった用法が見られる。大塚 (1976) S. 86 f. 参照 (用例および訳も同書より引用)。(3) Ahd. の例文の底本は「原典資料」に挙げたものを用いた。長音符は原則として付していない。

(4) ドイツ語における現在完了の発展過程については Erdmann (1886-98) Bd. 1, S. 103 ff., Behaghel (1923-32) Bd. 2, S. 270 ff., Dal (1966) S. 121 ff., Lockwood (1968) S. 114 ff., キルツ Ebert (1978) S. 57 ff. などをも参照。なお、特に haben + 過去分詞の形式においてはラテン語ならしはロマンス語の影響が想定されている。この点に關しても、上記文献のいくつかに議論が見られる。

(5) Ahd. の時代区分は、上限の基準を第二次子音推移として、下限のそれを非強勢母音の弱体化とすれば、大体六・七世紀頃から十一世紀中頃までとするのが妥当な線であろう。しかし、Ahd. 研究が主として文献時代を対象として行なわれる点を考えれば、概説書などによく見られる八世紀半ばから十一世紀半ばという区分も不当とは言えない。

(6) Lockwood (1968) S. 56 f. 参照。ちなみに、Wulfila は、原典の語順に反する場合もあつて、規則的に「名詞 + 所有代名詞」の語順を用いてゐる。Streitberg (1920) S. 186 参照。

(7) たゞは、Hundsruocher (1984) S. 646 では次のような論述がある。「特別な役割を演じてゐるのは韻文である。というのめ、それらにまつてメンタクスは確かに押韻形式・詩形・リズムによる制約を受けるが、他方で実用テキストの散文ではもはや見られないうールカイヤの語法、未だ見られなう改新的な語法が確認できるからである。」同様の見解は、Admoni (1990) S. 11 以下も述べられてゐる。

(8) Ahd. 入門書の中では、次のものに比較的まとまったシントaxis 記述がある。Jolivet/Mossé (1942) S. 161-209, Ellis (1953) S. 68-98, 高橋 (1994) S. 89-224 など。また、ドイツ語史の中での Moskalaia (1985) S. 120-140 の中で、Ahd. シントaxis の略述を含むものがある。(9) Greule (1982) が、その第一歩で、方法論と二十数個の動詞を対象とした実際のウマレントン分析を含む。

(10) 新保 (1985-86) 参照。

(11) Betten (1987) または Betten (1991) 参照。

(12) 最後の autem に相対する語 (de) は、ギリシヤ語原典には存在しない。ここでは、ルターはブルガータに従つて、この語を省いた。Betten (1987) S. 402, Anm. 32 参照。

原典資料

Tatian. Lateinisch und altddeutsch. Mit ausführlichem Glossar. Hrsg. v. Eduard Sievers. 2. Aufl. Paderborn 1892.

Notker der Deutsche: Der Psalter. Hrsg. v. Petrus W. Tax. 3 Bde. Tübingen 1979-83.

Die kleineren althochdeutschen Sprachdenkmäler. Hrsg. v. Elias von Steinmeyer. 3. Aufl. Dublin/Zürich 1971.

Offrids Evangelienbuch. Hrsg. v. Oskar Erdmann/Ludwig Wolff. 6. Aufl. Tübingen 1973.

D. Martin Luther: Die ganze heilige Schrift Deutsch.

- Wittenberg 1545. Letzte zu Luthers Lebzeiten erschiene neue Ausgabe. Hrsg. v. Hans Volz. Darmstadt 1972.
- 資料文庫
- Admoni, Wladimir (1990) : Historische Syntax des Deutschen. Tübingen.
- Behaghel, Otto (1923-32) : Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. 4 Bde. Heidelberg.
- Betten, Anne (1987) : Zur Satzverknüpfung im althochdeutschen Talian. In: R. Bergmann u. a. (Hrsg.) : Althochdeutsch. Bd. I. Heidelberg. S. 394-407.
- Betten, Anne (1991) : Textlinguistische Methoden in der historischen Syntaxforschung. In: Energeia Bd. 17. S. 22-35.
- Dal, Ingerid (1966) : Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. 3. Aufl. Tübingen.
- Ebert, Robert Peter (1978) : Historische Syntax des Deutschen. Stuttgart.
- Ellis, Jeffrey (1953) : An elementary Old High German grammar. Oxford.
- Erdmann, Oskar (1886-98) : Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung. 2 Bde. (Bd. 2 von Otto Mensing) Stuttgart.
- Greule, Albrecht (1982) : Valenz, Satz und Text. München.
- Grimm, Jacob (1893-98) : Deutsche Grammatik. 4 Bde. Neuer vermehrter Abdruck. Gütersloh. (zuerst Göttingen 1819-37)
- Hundsnurscher, Franz (1984) : Prinzipien und Methoden historischer Syntax. In: W. Besch u. a. (Hrsg.) : Sprachgeschichte. 1. Halbband. Berlin/New York. S. 642-653.
- Jolivet, Alfred/Mosé, Fernand (1942) : Manuel de l'allemand du moyen âge des origines au XIV^e siècle. Paris.
- Lockwood, W. B. (1968) : Historical German syntax. Oxford.
- Moskalkaja, O. I. (1985) : Deutsche Sprachgeschichte. 2. Aufl. Moskau.
- Streitberg, Wilhelm (1920) : Gotisches Elementarbuch. 5. u. 6. Aufl. Heidelberg.
- Wilmanns, Wilhelm (1906-09) : Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. Dritte Abteilung: Flexion. I. u. 2. Hälfte. Strabburg.
- 大塚高信 (1976) : シキソクソクノ文法 研究社。
- 新保雅浩 (1985-86) : 古語ソクソクノ語ヲ Valenz' ノゴトニシテ 筑波大学現代語・現代文学系『言語文化論集』18, S. 31-48; 19, S. 45-64 所収。
- 高橋輝和 (1994) : 古期ソクソクノ語文法 大学書林。(早稲田大学助教授・一橋大学講師)

テキスト1: Benediktinerregel (Steinmeyer: Sprachdenkmäler, S.203)

Lat.: Nullus in monasterio proprii sequatur cordis
 Ahd.: niheiner in munistre eikanes si kefolgeet* herzin
 [直訳: Keiner in (dem) Kloster (seines) eigenen folge Herzens]

uoluntatem: Neque presumat quisquam cum abbate suo
 uuillin indi noh erpaldee einiic mit abbate sinemv
 [(dem) Willen und auch nicht wage einer mit Abte seinem]

proterue infra. aut foras monasterio contendere...
 frafallihho innana edo uzsaan munistres flizzan...
 [frech innerhalb oder außerhalb (des) Klosters (zu) streiten...]

訳: 「誰も僧院において自らの心の欲するところから従ってはならない。また何人もその院長と厚顔にも僧院の中であれ外であれ争うような真似をしてはならない。」

註: si kefolgeetは形式所相動詞sequaturに倣って、受動の形を取っている。

テキスト2: Isidor (hrsg. v. H. Eggers, S.52ff.)

Lat.: ...Omissisque mundus demonom simulacris
 Ahd.: ...Endi dhazs mittingart firleizssi diubolo drugida
 [直訳: ...Und daß (der) Erdkreis verließe (der) Dämonen Trug]

reconciliaretur gratiē conditoris.
 | | |
 endi* aaur aruuegodi zi sines scheffidhes huldin.
 [und wieder zuruckkehrte zu seines Schöpfers Huld.]

訳: 「...そして世界が悪霊たちの偶像を捨て、再びその創造者の恩寵に立ち返るように。」

註: 原典の絶対奪格を「主文+endi "und"」の形で訳出している。

テキスト3: Otfriids Evangelienbuch I, 2, 1-6

Wola drúhtin min. já bin ih scálc thin.
 thiú arma múater min eigan thiú ist si thin!
 Fingar thinan dua anan múnd minan,
 theni ouh hánt thina in thia zúngun mina,
 Thaz ih lób thinaz si lútentaz*,
 giburt súnes thines, drúhtines mines:

訳: 「ああ私の主[なる神]よ、実に私はあなたの僕で、私の哀れな母はあなたのはしためです、あなたの指を私の口に当て、あなたの手を私の舌に触れさせてください、私があなたの賛美を語る事ができるように、あなたの御子、私の主[キリスト]の誕生を。」

註: lútentazは主語ihに一致してlutentiまたはlutenterとなるべきところだが、脚韻の要請により、lób thinazに一致させられている。

テキスト4: Tatian 16, 2 = Joh. 1, 37-39.

Lat.: Et audierunt eum discipuli loquentem et secuti sunt
Ahd.: Thô gihortun inan thie iungiron sprechantan inti folgetun

Ihesum. Conversus autem Ihesus et videns eos
themo heilante. Thô giuuantã sih ther heilant inti gisah sie

sequentes se. dicit eis: quid queritis? Qui dixerunt ei: rabbi
imo folgente, quad in: uuaz suochet ir? Sie quadun imo: rabbi

(quod dicitur interpretatum magister) ubi habitas? Dicit eis:
(thaz ist arrekít meistar) uuár artos? Thô quad her in:

venite et videte. Venerunt et viderunt ubi maneret.
quemet inti gisehet. Quamun sie thô inti gisahun uuár he uoneta.

et apud eum manserunt die illo; hora autem erat quasi decima.
inti uonetun mit imo then tag; thô uuas thiu zehenta zit thes tages.

Luther: Vnd zween seiner Junger höreten jm reden / vnd folgeten Jhesu
nach. Jhesus aber wandte sich vmb / vnd sahe sie nach folgen / vnd
sprach zu jnen / Was suchet jr? Sie aber sprachen zu jm / Rabbi (das
ist verdolmetscht / Meister) Wo bistu zur herberge? Er sprach zu jnen /
Kompt vnd sehets. Sie kamen vnd sahens / vnd blieben denselbigen tag
bey jm. Es war aber vmb die zehende stunde.

訳: 「その時、弟子たちは彼[洗礼者ヨハネ]が語るのを聞いて救い主[イエス]
についていった。その時、救い主はふりむき、そして彼らが自分について
くるのを見て、彼らに言った。『あなたたちは何を求めているのか。』
彼らは彼に言った。『ラビ(これは"師"と説明される)よ、あなたはど
こに泊まっていますか。』 その時、彼は彼らに言った。『来なさい、
そして見なさい。』彼らはその時ついていき、そして彼が泊まってい
るところを見、そしてその日は彼とともに泊まった。その時、その日の
第十時であった。」

テキスト1~4に関する断り書き: 底本は「原典資料」に挙げたものを用いた。
長音符は底本にあるもの以外は付していない。それぞれの日本語訳はAhd.原文に
対する訳文である。